様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２００８１

研究課題名（和文）ヴァリニャーノ『日本史』の翻訳・分析に基づく十六世紀日本の比較宗教研究

研究課題名（英文）Study of comparative religion based on Alessandro Valignano' s manuscript History of Japan

研究代表者
狭間　芳樹（HAZAMA, YOSHIKI）

京都大学・文学研究科・研修員

研究者番号：８０５８８０４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,500,000円、（間接経費）　750,000円

研究成果の概要（和文）：ヴァリニャーノの『日本史』（1601年）は、彼が三度来日しておこなった日本宗教研究の集大成であるとともに、イエズス会による日本布教活動の蓄積された成果でもある。本研究では、同書が（1）高名なフロイスの『日本史』と比べて、日本人の宗教的心性を信徒の霊的救済に見たこと、（2）ルター主義と一向宗（＝浄土真宗）の類似性を、信仰者の信心内容における同質性に見ていることを考察、解明した。

研究成果の概要（英文）：Alessandro Valignano's "History of Japan" (manuscript, 1601) is the complication of topics that he undertook over long years, and the accumulative results of Jesuits' missionary works in Japan, too. I researched deeply about the following two problems. (1) Compare with famous Louis Frois's "History of Japan", Valignano found out Japanese religious feelings in redeeming their souls. (2) He pointed out that there were similarities of Ikko-shu (=Shin Buddhism) and Lutheranism in their contents of faith.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：キリシタン　イエズス会文書　ヴァリニャーノ　比較宗教学　キリスト教　仏教　浄土真宗

１．研究開始当初の背景

1905（明治 38）年、東京帝国大学に日本で初めての宗教学講座を開設した姉崎正治は宗教学的見地からのキリシタン研究に着手し、キリシタン史を宗教学的に体系づけた。その後、1940 年代に入ると、民俗学的立場から考察がなされた岡田章雄や国語学的視座からの分析をおこなった土井忠生らにより一段と学際的なキリシタン研究が始まる。

さらに、イタリアのローマ・イエズス会文書館（Archivum Romanum Societatis Iesu）所蔵の原文書が、1960 年代後半に公開され始めてからは海老沢有道や松田毅一らによる膨大な翻刻・翻訳が刊行され、一次文献に基づく本格的なキリシタン研究が始まった。1989 年以降東京大学史料編纂所において、きわめて厳密な比較校訂がおこなわれ、その成果は『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集』として継続的に刊行中である。五野井隆史らによる精緻な研究が進むなか、日本史・宗教史はもちろん、高瀬弘一郎に代表される経済史といった様々な学問領域に、その研究は拡大、細分化されるに至っている。

ただし、比較思想の観点から精神風土や宗教的心性に言及した研究はフーベルト・チースリクをはじめとする神父や司祭、教会史家らによるものが大半を占めており、宗教学に立脚した研究が置き去りにされてきた感は拭えない。もちろん研究の基底に信仰が存する神学や宗教哲学的論究の意義は認められようが、やはり何より価値中立的な宗教学的視座からの研究の進展が強く要請される。

さらにキリシタンと一向宗（浄土真宗）との比較研究に関して述べると、この方面の研究の多くは両宗教の類似性を指摘するにとどまり、両者の比較を通じて「宗教の本質」を解明するところにまでは至っていない。すなわちキリシタン信仰の本質、改宗への内在的動機、棄教・殉教への理路について、比較宗教学的方法論により考察を進めることが求められている。

こうした背景のもと、本研究ではイエズス会の日本巡察師ヴァリニャーノ（Alessandro Valignano, 1539-1606）が 1601 年に書き残した『日本史』を手がかりとし、そこでの問題を分析することを試みた。

２．研究の目的

本研究の目的は、ヴァリニャーノの『日本史』の翻刻・翻訳を基礎として、従来のヴァリニャーノ理解を一歩進めるとともに、それらの作業を通じて仏教の宗門（一向宗）とキリシタン宗門とを比較宗教学の方法論から考察することで近世初期日本人の宗教観を解明するところにある。

日本におけるキリスト教の布教は 1549 年のザビエル来日に始まり、その後ヴァリニャーノの「適応主義」方策のもとで飛躍的な発展を遂げた。その方策は、高名な『日葡辞書』（*Vocabulario da Lingoa de Iapam com Adeclaração em Portugues*, 1603）の刊行に象徴されるように、宗教のみならず日本文化全体についての研究を進めることを基礎に据えて展開されたものである。

ヴァリニャーノはイエズス会の活動として屈指の成功を見た日本での布教を振り返って『日本史』の執筆を計画した。当初、全五巻を構想するも結局は第一巻を書き上げただけに終わったのであるが、当代の日本布教区責任者による総括書のもつ意義は、次に述べるように、きわめて大きい。

(1) ルイス・フロイスの『日本史』については先行する諸研究で扱われてきたが、ヴァリニャーノの『日本史』に関する考察は皆無と言ってよい。フロイスのものと比して、たとえ分量的に少なく、また未完の書であろうとも、当時の日本で布教方針を裁決できる立場にあったヴァリニャーノがフロイスの著作を不十分だとして、自らの観点で布教史を執筆したことの意義は大きい。

近年、ヴァリニャーノの「公式巡察報告書」（イエズス会インド管区が擁する主要布教地の政情・風俗・文化及び布教上の諸問題をまとめた史料）が、高橋裕史により翻訳され（『東インド巡察記』平凡社、2004)、新たなヴァリニャーノ研究が進みつつあるなか、『日本史』の内容を明らかにし、それが如何なる意図をもって執筆されたのかを確認することはキリシタン文書全体を精査するにあたり非常に意義が深い。

（2）キリシタン史における殉教現象の究明が必用であることは、これまでのキリシタン研究でたびたび指摘されてきたにもかかわらず未だその糸口すら掴めていない。その最大の理由は、従来の考察がその概念の分析に踏み込まず、殉教という現象をいわば感傷的な次元で理解してきたところにある。近年の佐藤吉昭の研究（『キリスト教における殉教研究』創文社、2004）は、客観的な殉教研究に先鞭をつけたものとして評価できるが、思想構造の解明においてはなお不充分である。ヴァリニャーノ『日本史』の徹底的な研究はこの課題の解明に重要な緒を与えるものである。

異文化との接触に始まり、驚異的な興隆を見せた後、弾圧によって終焉を迎えたキリシタン史のなかで生み出された殉教の思想構造を解明することは、それ自体の意義深さもさりながら、近世のキリスト教受容、ひいては当代日本人の宗教観を解明するにも不可欠である。さらに言えば、異文化交流という観点からの殉教研究はグローバル化が進む21世紀の課題とも連なるものである。

（3）キリシタン（カトリック）・ルター主義（プロテスタント）・一向宗（浄土真宗）を比較宗教学的に考察する。ヴァリニャーノが著した『日本諸事要録（日本管区とその統轄に関する諸事要録)』(*Sumario de las cosas que pertenecen a la provincia de Japón y al gobierno de ella*, 1583）には、ルターの教えと一向宗（浄土真宗）の教えとが同性質のものであるとの記述が見られる。

20 世紀以降のエキュメニズムの高まりとともに宗教間対話が重視されるなか、キリスト教と仏教とを扱う研究が一段と活発化し、キリスト教と浄土真宗、プロテスタンティズムと浄土真宗とを論じる研究も多く見られるようになった。しかしながら川村信三（『キリシタン信徒組織の誕生と変容―「コンフラリヤ」から「こんふらりや」へ』教文館、2003）など、いくつかのものを除けばキリシタンと浄土真宗を直接的に比較対象とした研究は現在もほとんどなく、加えて川村の研究もキリスト教側からの考察の域を必ずしも脱していないように思われる。本研究はキリシタンと浄土真宗とを比較し、価値中立的な宗教学的な観点から論究するものである。

以上の三点により、本研究は先行する諸研究には見られない特色を有する。

３．研究の方法

今日、ヴァリニャーノの『日本史』は、ポルトガルのアジュダ図書館とイギリスの大英図書館に所蔵されている。そこで、2011 年度は、まず当該史料についての事前調査をおこなった上で両館へ赴き、史料の調査・収集をおこなった。特にポルトガルでは、アジュダ図書館において『日本史』およびその関連史料を調査し、複写・収集した。そうして収集された二つの原文書の翻刻・翻訳を開始し、その際、両原文書を照らし合わせることにより、異同を確認し、データベース化した。

2012 年度は、前年度に引き続き翻刻・翻訳を進めた。イエズス会の公文書の多くはポルトガル語で記されているが、ヴァリニャーノの『日本史』に関してはスペイン語が中心であり、彼の母国語であるイタリア語やポルトガル語も混在している。さらにヴァリニャー

ノの来日前に作成されたイエズス会士の報告書簡をヴァリニャーノが引用する際には、たとえば原書簡がポルトガル語やスペイン語であっても、ラテン語による引用が多く見られることなどが、翻刻および翻訳作業を通して確認された。なお、翻刻の開始時期においては海外の研究者ダニエラ・シャーフ氏（ハイデルベルク大学）にも援助を得た。その後も、より正確な史料読解を期すために、それら中世各国語の翻刻に熟達した研究者としてメキシコ国立自治大学の有村理恵氏に協力を要請し、精緻な翻刻・翻訳に努めた。

そのほかイタリアのローマ・イエズス会文書館やスペインのマドリード王立史学士院図書館（Biblioteca de la Real Academia de la Historia）などに赴き、ヴァリニャーノの思想分析に必要な史料の調査を実施した。また、イタリアではヴァリニャーノの出身大学であるパドヴァ大学にも訪れ、複数ある当大学図書館に所蔵されているヴァリニャーノ関連資料についての調査をおこなった。

2013 年度は、『日本史』の分析に基づくキリシタンと一向宗との比較研究に重点を置き、分析をよりいっそう進めるために、関係研究者多数の協力を得た講演会形式の研究会を二度にわたり実施した。2013 年 11 月には「キリシタン研究における比較の視座」についての会を京都大学で開催し、天理大学の東馬場郁生氏から「きりしたん研究と宗教学的方法論」、南山宗教文化研究所の日沖直子氏から「カクレキリシタンの美術とキリスト教図像学―比較研究上の問題点について」との題目で報告をうけ、そこでの議論をもとに本研究課題が抱える問題点を検討した。

次いで 2014 年 2 月には本研究の完了に向けて、文書翻訳の問題についての会などを京都大学で開催した。『十六・七世紀 イエズス会日本報告集』などの翻訳がある京都外国語大学の東光博英氏から「イエズス会日本書簡集と邦訳」との題目で、特にエーヴォラ版『日本書簡集』の邦訳をめぐる問題点、すなわち未訳・誤訳といった具体例をもとに、イエズス会文書翻訳をめぐる問題についてきわめて示唆に富む報告をうけた。そして同朋大学の安藤弥氏による「本願寺・一向一揆と戦国期の民衆―キリシタンとの関係を視野に入れて」では、キリシタン民衆と比較の対象として扱った一向宗徒の一揆研究の現状と課題、ならびに近世日本の宗教状況をふまえた戦国期からキリシタン時代の「民衆」像について意義深い報告をうけた。それらを踏まえ、京都大学の芦名定道氏をはじめ、スペインやイタリア等、国内外の研究者を交えて活発な議論をおこなった。

なお、研究課題を遂行するなかで進捗状況および途中までの成果を随時学会や研究会において発表した。

４．研究成果

各国語が混在したヴァリニャーノ『日本史』の文体は、ヨーロッパの研究者たち、たとえばヴォレッチらにその書が雑駁であるとの印象を与え（Voretzsch, E. A., *Auf den Fernen Osten bezügliche Manuskripte in den Bibliotheken Portugals*, 1925）、史料としての意義が正当に評価されてこなかったといえる。実際、『日本史』全体の翻刻ならびに翻訳は未だ全くなされておらず、今やその存在は忘れ去られたかのごとくである。しかしながら、ヴァリニャーノが 1583 年に著した『東インドにおけるイエズス会の起原と進歩の歴史』（*Historia del principio y progresso de la compañía de la Jesùs en las Indias Orientales dividida en dos partes*）、また、同じく 1583 年に執筆された『日本諸事要録』から 18 年後、あるいはその補遺―『日本諸事要録・補遺』（1592）から見ても 9 年後にあたる『日本史』の執筆時期を考える

と、三度の日本巡察を終えた後のヴァリニャーノの日本に対する総合的評価を知りうる点で、それはきわめて重要な史料なのである。

そもそも『日本史』の原文書の最初は「Del Principio y progresso de la Religilon Christiana en Japon」、すなわち「日本におけるキリスト教の始まりと発展」とあり、そのあとに「新しい教会に対して主が行使する特別な摂理」と続いている（Bibliotecada Ajuda, Jesuitas na Asia, Códice. 49-Ⅳ-53)。したがって、そのタイトルは『日本におけるキリスト教会の歴史』とするのが適切かもしれない。しかし、冒頭でヴァリニャーノが布教開始以来現在に至るまで「常に主によって導かれてきたこの日本の新しい教会の始まりと発展と摂理について著述する」であるとか、「未だ歴史という形式で、明瞭さと識別をもって執筆されたことがない」ので「明確に記述することによって、イエズス会士たちが様々な時期と場所にて異なる事柄について書簡の形式で記したことを正しく理解するため」の書物を執筆することが「必要不可欠」であると、本書の執筆動機を述べていることに鑑みれば、在日キリスト教会史にとどまらない『日本史』が構想されていたことは確かである。

ヴァリニャーノは「本論考において取り扱うべき様々な事柄に関する疑問を調べ、明白にする」、「真実を明らかにし、体験不足や日本人の性質・習慣に関する知識不足から生じる全ての疑いを晴らす」ために「しっかりと順序立て」た構成により読者の理解を促し、納得できるように「全文を５巻に分けた」と記している（「読者への序文 Prohemio al Lector」)。

もっとも、先述したように結局は第１巻のみしか残されていない。ただし「読者への序文」には「テーマを五つのジャンルに絞ることにした」と明示されており、それによると仏教をはじめとした日本の諸宗教についての詳細な記述はおそらく第５巻でなされるはずであった。したがって現在確認できる第１巻では、宗教に関わる直接的な言及自体は多くないが、第１巻をその他のヴァリニャーノの著作や報告書簡と摺り合わせることで、イエズス会の見た日本の諸宗教、ひいては日本人の宗教意識をうかがうことができる。

すなわちヴァリニャーノは「日本諸事要録」で、「仏僧が教える邪悪な宗教」を糾弾しつつも「これほど邪悪な宗教や数多の（罪に陥る）機会や放縦さにもかかわらず、彼等が現在具有するように、いとも優れた数多の天性を保持していることは驚嘆に価することであって、私が見たあらゆる諸国民の中では、彼等はもっとも道理に従い、道理を容易に納得する国民である」と述べ、日本人が「非常に優れた風習や天性を具有し、それによって、世界でもっとも高尚で思慮があり、よく教育された国民に匹敵」すると評価していた。また、同要録の第 17 章では「日本人は宗教に対して、いかに優れた素質を有するか」ということについて記しており、「この点は、主なる神の大きい御恩寵に授けられている我等の宗教にあっては、いっそう大いに期待しうる」との見解を示している。

ヴァリニャーノの見立てによれば、当時の日本人にとって必要なのは、何よりも本性の発露を妨げている「邪悪な宗教」に代えて、正しい信仰へと導く道筋をつけることであった。彼は『日本史』でも「日本の特質およびその国民の習慣について」（第 7 章)、「日本人の性質および習慣について」（第 8 章）といった章を立てて論じているが、その論調は基本姿勢に『日本諸事要録』と大きく変わるものではない。つまり三度の巡察を経た後でも、日本人が理性に従う国民性、ゆえにイエズス会が説く道理によって容易にキリシタンに入信する（第８章）と論じている。

『日本のカテキズモ』（1586）などを合わせ読むと、ヴァリニャーノが日本宗教の姿として、シンクレティズムをともなった仏教や神道を正確に理解していたことまでもがうかがえる。フロイスに比して、より深い位相で日本人の宗教的心性を捉えたヴァリニャーノが、ルター主義と一向宗（＝浄土真宗）との同質性を指摘したこと、そしてその理由を考察することで、近世日本における宗教観の解明に大きな一歩を進めることができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）
①狭間芳樹、キリシタン研究の方法論的諸問題と比較思想の意義、アジア・キリスト教・多元性、査読有、第 11 号、2013、129－144
DOI：http://hdl.handle.net/2433/173549

②狭間芳樹、イグナチオの霊性と宗教の民衆化－キリシタン時代における「民衆」と「個」、アジア・キリスト教・多元性、査読有、第 12 号、2014、93－110

〔学会発表〕（計 4 件）
①狭間芳樹、キリシタン時代におけるＡ・ヴァリニャーノの神仏理解、宗教民俗の会、2012 年 06 月 30 日、法藏館

②狭間芳樹、ヴァリニャーノの日本宗教分析とキリシタンの「秘跡」理解、キリスト教史学会（第 63 回大会）、2012 年 09 月 14 日、福岡女学院大学

③狭間芳樹、キリシタン研究の方法論的諸問題、アジア・日本のキリスト教と宗教的多元性研究会、2012 年 12 月 22 日、京都大学

④狭間芳樹、ヴァリニャーノの日本宗教理解、日本宗教学会（第 72 回学術大会）、2013 年 9 月 7 日、國學院大學

６．研究組織
(1)研究代表者
狭間 芳樹 （HAZAMA YOSHIKI）
京都大学・文学研究科・研修員
研究者番号：80588046